
王様と喪女

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様と喪女

【Zコード】

Z0653BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとつて結婚しろとはるかに迫るが……？

この小説は、すぴばる小説部にも投稿しています。

よし、これが打ち終わつたら、すぐに家に直帰するわ。
わたしはそう心に堅く決めて、主任に頼まれた文書を普段の一割
り増しくらいの速度で、パソコンのキーボードを叩いていた。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

……そんなわたしの印象は、とても地味だ。

ファンデを薄く塗り、リキッド口紅を軽くつけたのみの化粧は、
よく言えばナチュラルメイク。

一応手入れはしているけど、眉も描いていないという手抜きぶり。
髪の毛もうねるくせつ毛を簡単に一つにまとめただけだ。

それに、会社の事務服があか抜けない水色のだぼつとしたものだ
というのも、わたしの地味さを更に強調していた。

だけど、わたしは作業員のおばちゃん達相手に、巻き髪したり、
つけまつげバチバチしたりする趣味はない。

そんな支度する暇があつたら、趣味か睡眠に当てたい。

そんなわけで、わたしはとつても垢抜けなかつた。

ただ、わたしに特筆するべきことがあるとすれば、大きすぎる胸
くらいだろう。これだけは、みんなに褒められる。

わたしにしてみれば、肩は凝るし、太つて見られるし、服選びは
大変だしであまりいいことはないんだけどね。

「只野さん。仕事あがつたら、みんなで飲みに行かない？」

「あ……、『めんなさい。今日は用があつて無理なんです。すみま
せん』

ちょうど金曜日の仕事上がり前といつともあつて、会社の営業
の相田さんという女性から誘いを受けたけれど、気乗りのしないわ
たしあはせつかくのお誘いを断つてしまつた。……本当は大した用は

ないんだけどね。

「只野さん、付き合い悪いよー」

「本当にごめんなさい」

相田さんは冗談めかして言つてくるけど、たぶん内心では氣を悪くしているだろ?。

この飲み会、本当はただの飲み会じゃなくて、実際のところわたしと取引先の結構お偉いさんを引き合わせるための場であることをわたしは知つている。

「あの子もこんな機会でもなきや、彼氏もできないんだから。それにあちらともこれからもいい付き合いができるかもしないしね」「うつかりというか、ラッキーというか、わたしが給湯室でお茶を淹れている時に、そのドアの前で相田さんが同じ営業の人と話しているのを聞いてしまったのだ。

なんでも、その取引先の人はわたしの胸が大きいのが気に入つたらしい。

……とすると、うちの会社に訪ねてくる度にわたしの胸のことを「相変わらず大きいねえ」とセクハラ発言してくるあの人だろうか。

……うん、やっぱり会いたくない。

会社のためなら、会つた方がいいのかもしれないけど、接待とか

苦手だし。わたしにはお茶出しどがせいぜいだ。

それに、お酒の席とかで「まかされて、胸とか触られたら最悪だし。

おまけに、男慣れしていないわたしが取引先の人につましく対応できることも思えない。

「なんだ、このつまらない女は」

なんて思われたら、ちょっと、いやかなりへこむかもれない。

それでもつて、もしかしたら円滑だった今までの取引先との仲も悪くなるかもしれない。

……いや、これは最悪の事態を想像しただけだけどさ。

でも、相田さんのわたしへの心証は多少悪くなるかもしないけ

れど、それは仕事の方で挽回することにしよう。

わたしは渋る相田さんに謝り倒してなんとか飲み会は回避するこ
とに成功した。

「そんなんだから彼氏もできないのよ」

相田さんに嫌みを言われたけれど、わたしは気にしないことにし
た。

これは何度もいろんな人に言われてのことだつたからだ。

確かにわたしには恋人はない。というかこの歳まで彼氏がいた
ことはない。

いわゆるもてない女　喪女というやつだ。

顔自体はそこまで悪くはない……と思つ。

ものすごいブスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔。

もちろん、この歳になるまでに恋人が出来る機会が全くないこと
はなかつた。

今までに異性を紹介してくれる相田さんみたいな人もいたし、知り
合いや親に婚活を勧められたりした。

でも、わたしにはめんどくさい男女の関係よりも、もっと大事な
ことがあつたのだ。

「よーし、下書きまでは完成ーっと」

わたしはあの後、主任に文書を確認してもらつてOKが出たとこ
ろで、脇目もふらず家に直帰した。

趣味の漫画の下書きが予定したところまで終わりそつたから
だ。

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よ
しかつたので、その事に浮かれ気味だった。

これなら早めにサイトに載せられそうだし、気の乗らない飲み会

よりは、時間の過ごし方としてはやつぱりこっちのほうが有意義だ。今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、わたしはそれが嬉しくて頑張ってサイトを更新していた。でもどこかの出版社に投稿する気はさらさらなかった。

そんな自信もなかたし、ウェブ経由でいろいろな人に見てもらえるということにわたしは満足していた。……それは完全に自己満足っていうものかもしれないけれどね。

「しつかし、さすがに肩こったなー」

ジャージ姿のわたしは、自分の部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思うが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは今度のサイト更新分の下書きまで終わった原稿と漫画道具一式を百均で買ってきたプラスチック容器にまとめるとい、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、わたしのもう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だった。……まあ、あんまり他人に見せられるような趣味じゃないよね。

預金通帳を見て、ニヤニヤする様は自分でも不気味かもしないと思う。

しかし、その予定に反して、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめった。

「いってえ～っ！」

一十七の女の叫び声として、「これはどうかと思うが、本当に痛いのでしょうかない。

人間、とつさの時にはつい地が出てしまつものだ。

だが、原稿一式は死守。

“ひつあつても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうにか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまってあるし、あんなふうに散らばる「とはないはずなのに」。

「……おー」

わたしが舞い落ちる紙に見とれていると、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさりとした。……がなんだこれ。

「おー、やめるー。」

なぜかいかも高価そうな馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて呆然とする。

どこだ、じこは。

さつ きまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い室内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、いつしかせわざくろじやなかつた。

いつたい、なに? なにが起つたの?

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動していくなんてあり

えない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……これはもしかして、ひょっとしてひょっとすると、SFとかで言うなら海外とかにテレポート？

もし、ファンタジーならウェブ小説とかでよくある異世界トリックってやつですか！？

高価そうな馬鹿でかい机の上からとつあえず降られたわたしは、田の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだが、どこから来た」

移動魔法とか言われても、よく分からない。

美形から魔法って言葉が出たってことは、やつぱりこれはファンタジーで、異世界トリップってことなんだろうか？

わたしが言葉を失つていて、美形は「答える」と厳しく言つてきた。

田の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から來ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本で通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここがわたしが危惧したとおり異世界じやなければだけど。

「産業が工業中心の島国です。ジャパンとも呼ばれています

「……ジャパン？ 島国？」

美形男は首を捻つてる。これでも通じないのか。
やつぱりこには、考えたくないけど異世界なんだろつか？

「……恐ながら」

今まで気がつかなかつたけど、近くには五十代くらいのおじさん
がいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルティアの最強の女魔術師がその国の出身だつたかと」

わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぽかんとしてしまつた。

「…………そつすると、その最強の女魔術師つて、日本人なの？」

「…………そうか。異世界召喚だといつなら、こつも自然に言葉が通じるのは疑問だつたが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルティアに問い合わせなければなど呟いた。

「…………あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

異世界では言語が共通とかはないんだろうか。

「それはそうだろう。…………おまえはまったく行つたことのない大陸で話が通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまつた。

アメリカに行つて、日本語が通じないと一緒だ。

まあ、稀にハワイとかグアムみたいな観光地の例もあるけど、でもそれは特殊な例で、一般的には他の大陸で日本語は通じない。

「言われてみれば、そうですね」

「…………でも、なんで召喚されたのがわたし？」

こんな枯れた地味女じやなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「…………しかし、召喚されてきたのは分かつたが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい！」

美形に呻くよつにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまつた。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだつたのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるつて……、再発行してもうえぱいいだけでは？」

なんだか嫌な予感をじわじわ感じながらもわたしは答える。

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもいいわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだつた。

「す、す、すみません！」

これつて、わたしがこの人の婚礼を駄目にしちゃつたつてことだよね。

わたしは頭を下げて美形に謝つたけど、こんなことでは許してもられないだろうな。どうしよう。

ちらりと美形を覗うと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言つたことで、わたしは許してもらえたのかと思つて頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思つてもいなかつた彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。今まで男とは無縁の生活をしていたのに、いきなり花嫁になれてなんなんだ！

「俺だつて嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まつていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

「この人がせつぱ詰まつていることは感じられたけど、やつぱり納得できないよ。

こんな美形なら、地位もありそつだし、女の子もよりどりみどりそつなのに。

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり訳も分からず俺の花嫁にされる姫が氣の毒だ」

はい？ この人今、姫つて言った？

姫つて、貴族とか王族の女の人がよね？

……そんな人を花嫁に出来る日の前のこの美形はいつたい何者なんだ。

「姫つて……、あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィイだ」

「ルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなつてくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメ派だ。

わたしは目の前の緊迫した状況を一瞬忘れて、とぼけたことを思う。

「違う。カ・レ・ヴィイだ」

すると美形が律儀にゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……つて、国王なんですか！？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィイ王が呆れたように溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかつた。

だつて、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれつて言われてるつてことじやない！

だとすると、わたしは国王の結婚を駄目にしたつてこと…？
是非とも彼との結婚は拒否したいけど、なんといっても相手は王様。決定権はむこうにある。

下手したら不敬罪で投獄されちゃつたり、最悪の場合、國家同士の繋がりの機会を駄目にしたつてことで、極刑に処されたりするかもしれない。

あああ、まだ死ぬのは嫌だ。死にたくない。

今描いている漫画もまだ完結していないのに。

それなのに、なんでよりによつてわたしはそんな人の結婚を滅茶苦茶にしちやつたんだよーつ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653ba/>

王様と喪女

2012年1月1日21時47分発行